体験過程を推進させる応答

－機能する応答としない応答、体験過程流コラージュワークの実践より－

矢野　キエ

Ⅰ　はじめに

体験過程流コラージュワークにおいては、作製者が自身の創ったコラージュについて語るなかで、作製者にとっての意味が見出される。その過程では、聴き手がどのように聴くかが重要であるとされる。つまり、作製者が、コラージュや切抜きにある暗在的な意味に注目し、そこから語れるようにするのである（Ikemi, et al.,2007[1]:矢野,2010[2]）。具体的には、矢野（2008[3]）が示すように、１）「まだよくわからない」ところに目を向ける。２）浸る（(Dipping[4]）３）言葉になってきたら、リフレクションを中心に聴く。リフレクションに加えて、フォーカシングの問いかけ（asking）を用いることもある。例：この切抜きは何を伝えているのだろう。４）リスナーに感じられたことを伝える（Crossing[5]）である。

ジェンドリン（Gendlin,1968[6]）は、”The Experiential Response.” において、体験過程に注目し、暗黙的で複雑な体験過程を指し示す応答が、話し手の気づきや新しい理解を促進すると主張している。上記のコラージュワークにおける応答は、コラージュに含まれる暗黙的な意味を指し示すものとして、体験的な応答に通じると考えられるのではないだろうか。また、ジェンドリン（Gendlin,1968[7]）は、体験過程はさまざまな側面をもつため、応答においては、その可能性をいくつも試せばよいとしている。このことから筆者は、コラージュワークにおいて、聴き手が自由に質問することや聴き手に感じられたことを伝えることで、話し手のプロセスは進み、気づきや新しい理解が生じることを明らかにした（矢野、2016a[8]）。

一方で、筆者はコラージュワークを重ねるなかで、話し手の体験から、リフレクションの応答に違和感を覚えることが時折あった。話し手のプロセスは次に進んでいるのに、聴き手によるリフレクションが返ってくることで、元に引き戻される感じがするのである。また、上述したこととは逆に、自由な質問が、話し手のプロセスを邪魔するように感じられることもあった。つまり、通常はプロセスを促進する応答も、何らかにプロセスの妨げとなることがあるのである。そこで本稿においては、機能する応答と機能しない応答の特徴を示し、体験過程を推進させる応答について検討したい。手順は次の通りである。はじめに１）体験過程流コラージュワークの概略と特徴を示し、２）聴き手の応答について論じる。次に、３）３事例を掲示し、応答がどのように機能しているか、していないか、その特徴を明らかにするとともに、推進される応答について検討する。最後に、４）コラージュワークの今後の可能性について言及したい。

Ⅱ　体験過程流コラージュワーク（Experiential Collage Work）について

体験過程流コラージュワーク（以下、ECW と表記する。本稿では「コラージュワーク」と記載している箇所もあるが、同様のものを指す）は、フォーカシングのワークショップで用いられていたコラージュワークをまとめたものである（Ikemi, et al.,2007[9]:矢野,2010[10]）。その特徴は、コラージュ作製者が、コラージュについて語るなかで、作製者自身にとっての意味を見出すことと、コラージュをフェルトセンスとシンボルの相互作用の観点から考察することである。また、Part1 と Part2 の 2 つの過程があり、以下にその手順を示す。

Part1 は、作製の過程である。作製者は台紙の色を選び、雑誌をめくりながら目に留まったものや気になったものを切り取る。ある程度切り取ったら台紙に貼り付ける。これらの作製の過程はフェルトセンスに基づいて作業が行われる。すなわち、種々の色の台紙から目に留まる色があり、雑誌のなかの雑多な写真、絵、文字、模様のなかから、何かが目に留まる、あるいは目を引くものがある。台紙に貼り付けるときには、ここは何か違うと感じ、少し動かしてはここがぴったりと感じるなどの感覚的に微調整をしながら位置を決める。ある程度終わったときには、これで終わったという完了の感覚がある。つまり、これらの感覚は、コラージュ作製という状況における感じられた感じ、フェルトセンスである。したがって、こうした感覚によって作業が行われるので、Part1 においては、フェルトセンスに基づいて作業が行われるといえる。アートセラピストでフォーカシング指向アートセラピーを提唱したローリー・ラパポートは、アートの作業においては、フェルトセンスは暗に在ると指摘している（Rapport,2008[11]）ことと合致する。

Part2 は、コラージュに関わる過程である。コラージュ作製者は、自身のコラージュについて自由に語り、作製者にとっての意味を見出す。つまり、コラージュについて語ることで、何かの気づきが生じたり、新しい理解が生まれたりするのである。馬の親子の写真から、自分自身と子どもとの関係について新しい理解が生じたり、赤ん坊を抱いた老婆の写真から、自分自身のいのちと生をいとおしむような感覚が生まれたりした例がある（矢野,2010[12]）。聴き手はリフレクションを中心に聴くが、前述したように問いかけをしたり、感じたことを伝えたりする。このときには、聴き手は、話し手の話を聴きながら、写真からの印象を感じている。さらに話し手から伝わってくる感じも感じている。これらが重層的に響き合い、聴き手の発言となる（矢野,2016b[13]）。聴き手の発言は、話し手の体験と交差（Gendlin,1995[14]）し、新たな理解となる。Part2 においては、個々の切抜きやコラージュ全体からフェルトセンスが呼び起され、言葉になったり、何かが想起されたりする。話し手の言葉がリフレクションされると、返ってきた言葉と感じられている感じを照合する。想起されたことは、切抜きと照合され、次の想起が生まれる。Part1 では、フェルトセンスに基づいて作業が行われるのに対し、Part2 では、フェルトセンスが呼び起され言葉になっていくというフェルトセンスの逆向きの働きがあることが特徴である。

以上 ECW の手順を見てみると、ECW の体験には、絶え間ない相互作用があることがわかる。つまり、作製の過程では、作製者と写真、文字、絵、台紙（色、配置）の相互作用、関わる過程では、作製者（に暗黙的に感じられている感じ）と、切抜き、コラージュ全体、聴き手の言葉、聴き手の存在、作製者自身の言葉、想起されることなどとの相互作用である。この観点から考察すると、コラージュ作品は、作製者のまだはっきりとしていない感じられた意味が、写真などの切抜きによって、意味として成立したものであるといえよう。つまり、コラージュ作品は、「体験（感じられた意味）」の「表現」である。一旦形となっているが、そこには暗黙的な意味が含まれている。そのため、次の関わる過程で、作製者がふり返って観ることを通して、意味が立ち現われるのである（矢野,2016b[15]）。このようにみると、コラージュ作品の表現は、変化し続け、いつも新鮮な意味が創られていくことがわかるだろう。ある切抜きについて、出来上がったときと語り終えたときでは印象が変化していたり、数日経って再度コラージュに関わってみると、違った感じが現れ、新たな意味が見出されたりすることもある。表現は常に進展するのである。

Ⅲ　聴き手の応答について

１．暗黙的な意味に問いかける問いかけ

コラージュについて語るときには、切抜きそのものの説明ではなく、写真の印象や、作製者にはその写真がどのように感じられるかに注目してもらう。写真に含まれる暗黙的な意味を明在化するためである。これは次の問いかけによって行われる。たとえば、「それはどんな感じだろう？」「そこから何か伝わってくるものはあるだろうか？」「そこにいると思うと、どんな感じがするだろう？」などである。話し手に何か感じられる感じが出てきたら、聴き手はリフレクションを中心に聴く。そのことによって、話し手は、感じに浸りながら、返ってきた言葉を感じられた感じと照合し、その通りだと確認したり、少し違っている場合は、再度ぴったりする言葉を探したりするというプロセスが生じる。

聴き手は、その切抜きを感じ、自身に浮かんできた問いを話し手に尋ねることもある。表１は筆者の体験からまとめた問いかけの例である。夢への問いかけ（Gendlin,1986[16]）と同様、これらは切抜きの暗黙的な意味に問いかける点で有効であると考えられる。また聴き手が、自身に感じられたことを伝えることも有効であるとされている（三宅,2007[17]:矢野,2016b[18]）。作製者の話を聴き、同時に切抜きを感じていると聴き手に浮かぶ感じがある。この感じを作製者が十分に語ったあとに伝えると、作製者の感じられた感じと交差して、作製者の体験が推進し気づきをもたらすためである。

表１　問いかけの例

これを眺めていると、どんな連想が浮かびますか？
眺めていると、どんな感じがしますか？
全体のなかで、もっとも奇妙だ、よくわからない、印象的だと感じるものはどれでしょう。
これは馴染のものでしょうか？
（馴染がない場合）仮にあなたが変身してこれを身に付けたとしたらどんな風になるでしょう？
生活のなかで、この感じと同じような感じはあるでしょうか。あるとしたら、それはどんなとき？
これ（風景、建物）から何を思い出しますか？
これと似た場所に行ったことはありますか？
窓の外には何がありそうでしょうか？窓の中は？
あなたはこの景色のなかでどこにいるでしょうか？
どこからこの景色を眺めているでしょうか？
あなたの生活のなかで、どんなところがこの感じと似ているでしょうか？
このなかであなたはどれでしょう。
この人から何を思い出しますか？
その人を１つの形容詞で表すとしたら、何がいいでしょうか。
この人はどんな感じの人でしょうか。どのような人で、どのようにふるまうでしょうか。
もしそれがあなたの一部であるとするなら、それはどんなところでしょうか。
どんな感じでこの人（動物）はいるでしょう？
そのような感じはあなたにありますか？（人、動物）
その人（動物）になってみるとどうでしょう？
もし、それ（人、動物など）が何かを言っている（考えている）としたら何を言っている（考えている）と想像しますか？
これ（人、動物など）は、何を、どこを見ているのでしょう？
このあと、この人（動物）がどこかに行くとしたら、どこに行くでしょう？
その人（動物）に、あなたはどのようにふるまいますか？
それが、もしあなたに話しかけているとしたらどんなことでしょう？

ところが、冒頭に述べたように、機能する応答としない応答がある。どのような場合に機能し、どのような場合に機能しないのか、機能しない場合、どのような応答の可能性があるのか、次に見てみたい。その前に、コラージュの特徴について論じ、応答について検討する。

２．問いかけられるコラージュとは

コラージュ作品は、作製者が暗黙的に感じられている感じが、写真などのシンボルと出会って、一つの形になったものである。つまり、感じられた感じ（フェルトセンス）が可視化されたものであるといえよう。したがって、この可視化されたものに、どのように問いかけると、体験過程は進展するかを考えることになる。コラージュにおいては、聴き手は、作製者の話を聴きつつ、切抜きを味わい、その感じを感じることで、切抜きへの問いかけが生まれる（矢野,2012[19];2103[20];2016b[21]）。問いかけはマニュアルに即したものではなく、そのときどきの、作製者の話と切抜きから感じられた感じから聴き手に浮かんできたものが問いかけとなる。これはシンボルとフェルトセンスの相互作用の視点から考察すると留意する点である（したがって、表の問いかけは可能性の一部でしかない。シンボルとフェルトセンスの相互作用については、Gendlin,1997[22] 初版は 1962; 矢野,2016b[23]を参照されたい）。

こうした聴き手が、作製者の話を聴きつつ、切抜きを味わい、その感じを感じる体験は追体験といえるだろう。追体験は、最近池見（Ikemi,2017[24]）が提唱している概念である。池見は、追体験を説明するときに、物語（砂浜を歩く話）を聴くときの体験を例に挙げている。砂浜のストーリーが語られ、それを聴いた人に聴きながら抱いたイメージを語り手に伝えてもらい、語り手は自分のイメージと重ねていく。すると、語り手が聴き手から受け取ったイメージのなかには、語り手のイメージと交差して、語り手のイメージに追加されるものがある。一方で、交差せずに退けられるイメージもある。興味深いのは、これだけでなく、はじめは語り手のなかには“ない”と思われたイメージを再度確認してみると、“そういえば、ある”と改めて加えられることがあるのである。

ストーリーでは語られていなくても、語り手のイメージには、語られる以上のものが暗に含まれており、それらが聴き手のイメージと交差するのである。聴き手のイメージは、語り手の感じられた感じに暗在していたといえる。上記の物語を語る例（Ikemi, 2017[25]）も暗在と交差する 1 例であるが、“ない”が“ある”に変化してイメージが新たになる体験は、コラージュワークの関わりの過程において、作製者と聴き手のやりとりのなかでも起こる現象である。ある切抜きについて話し手が語り、聴き手が自分の印象を伝える。そのときには、作製者にはその印象は自分の感じにはないと思っていても、他のやりとりをしているうちに、作製者のイメージに付与されることがある。これらは、ジェンドリンの次の言及を見てみると合点がいく。

具体的なフェルトセンスは常に複雑であり、暗黙に非常に多くの側面をもっていると知っていれば、あれこれ試すことができるだろう。（Gendlin,1968 p.212[26]）

話し手が語るところにある“感じられた感じ（フェルトセンス）”は、暗黙に多くの側面をもっている。ゆえに、他者の言葉（イメージ）は、刺激となって、新たな側面を浮かび上がらせる。矢

野（2016a[27]）は、グループコラージュにおいて、メンバーが自由に質問をしたり、感じられたことを伝え合ったりすることによって、作製者の意味が進展することを示した。

池見の砂浜のワークは、語り手の語りを聴き手はイメージして追体験する。一方で、コラージュワークでは、前述したように、作製者の話と、感じられた感じが可視化された写真の両方を感じて追体験するという二重の追体験となっていることが特徴であるといえるだろう。

それでは、暗黙に多くの側面をもっている感じられた感じ（フェルトセンス）にどのように応答することが作製者の体験過程の推進に寄与するのか、あるいはしないのか、事例を提示し、機能する応答と機能しない応答について検討する。

Ⅳ　機能する応答と機能しない応答

１．事例１

以下に示す事例は、グループコラージュのセッションの一部を要約したものである。聴き手は筆者で、作製者は、グループのメンバーである。メンバーは筆者以外３人いるが、以下は、筆者と作製者のやり取りのみの箇所である。メンバーは一般の女性（50 代）で、フォーカシングのセッションの経験はない。本グループコラージュは、同じメンバーで２，３カ月に１回、約８年継続して行っている。

コラージュ１

作製者は、左下の数枚の料理の写真について次のように語った。

「職人が相手のことを考えて、最新の注意で精一杯料理を出す。手間をかけて作った一つ一つのようだ」

聴き手（筆者）は作製者の話と写真を味わった。写真は確かにそのように見えた。作製者の何か思いが込められているように感じた。しかし、それは聴き手にはしっくりと伝わってこなかった。作製者は写真に何を感じているのだろう。作製者の写真から感じている感じが、もうひとつよくわからなかった。そこで、聴き手は、作製者の感じを確認してみることにした。

聴き手は、「これらのもの（語られた料理の写真）と、ご自分との距離感はどうでしょう？」と問いかけた。すると作製者は、「あ、」と声を上げ、「私にこのようにしてもらいたいのかな」と言った。仏像や画面上の写真は、「守られている感じ」と作製者は言ったが、それとつながりがある感じのようであった。後日、作製者は、メールにて「大丈夫、しっかり出来ると思って、思い込もうと思っているけれど、やっぱり心の中は不安で一杯だったのだと・・・」と報告した。作製者には困難な状況があり、自分ではしっかり対応できると思い、そのように思い込もうと思って対処しているものの、実は不安で一杯だったことに気づいたということであった。不安で一杯の作製者自身をこそ、思いやってもらいたいと思っていたようであった。

１－１　事例１の考察

聴き手の「距離感」という問いかけは、聴き手に感じられた“ズレ”を確認するものであった。すなわち、聴き手は、二重の追体験（話し手の話を聴きつつ、写真の感じを感じようとする）を行い、今語られていることを理解しようとした。このときに、聴き手の感じと、語りと写真から伝わってくることの“ズレ”であった。

この「距離感」という問いかけによって、思いは込められているが、どこか客観的に描写されていた写真が、作製者に引き寄せられ、作製者自身の感じとして言い表されることになったのではないだろうか。つまり、切抜き（写真）が、直接的に感じられるものになったのである。距離感を問うことで、写真と作製者との距離が接近したといえる。ここから、作製者の状況と交差し、「心の中は不安で一杯だったのだ」と新たな理解が立ち上がったといえる。この「～だったのだ」と気づくという体験は、ジェンドリン（Gendlin,1997[28]）の記述－ ”was” の体験－から池見（池見,2016[29]:Ikemi,2017[30]）が提唱している ”The carried forward *was*” の体験であろう。体験が推進されると、（今までずっと）そうだったのだ、と今気づくのである。

２．事例２

次に示す事例は、1 対 1 のセッションの逐語記録の一部である。セッションは IC レコーダーで録音され、筆者が逐語を起こした。聴き手は筆者で、話し手（作製者）はフォーカシング経験者の女性（30 代）である。以下の記録は、コラージュについて話し始めて約 15 分経たところからのものである。左下の灯りの景色と金箔のうさぎ、灯りの景色右上の器について語っている箇所である。F は話し手（作製者）、L は聴き手、＜＞内は互いの発言、（ ）内は筆者による補足、時間は沈黙の時間を表し、[ ]内は、該当写真を示している。

コラージュ 2

F1:これは[金箔のうさぎ]、ちょっとこれが、ちょっともう今、こう見ると、ちょっとなんかうるさいっていうか、うるさいっていうか、なんかこう（笑い）。なんかきらきらしてて、なんかそれにすっごく惹かれたんですよ、惹かれて、でもなんかちょっと今見るとちょっと疲れるって感じで。どちらかいうと、こう見て（手で覆う）、この景色[灯りの景色]を見てると、なんかすごく落ち着くっていうか、これはなんかすごくいい感じだ、ていう。このなんかこう薄暗いなかで、ちょっとこう光が、灯りがともっているなかで、*こういうところを、眺めるというか、なんか、いうのは、なんかすごく落ち着くっていうか、いい感じだなあって、そんな感じですかね～～。*（7秒）　*うん・・これはなんかずっと、なんか見ていたい感じ。落ち着いてくるっていうか。これはなんかいい景色ですね。なんか。いい景色というか、本当になんか落ち着くっという感じ、ですかね・・・*(6 秒)*。うん・・・。そんな感じ。なんかこれはいい感じですね。で、うん・・・これもなんかすごい・・・なんか、静かっていうか、なんかこうほんとに静かっていう、な感じですかね、静かな感じ、に見える・・・*(17 秒)、*うん、なんかそんな感じですね。*（上の斜体の部分は前よりトーンがさがり、落ち着いた感じで話す。下線の部分は声が小さくなったところ）

L1:このへんとか、これとかこれとかが、静かな感じとか、眺めていたい感じとか、

F2:そうですね、これ[景色の上の写真の器]はなんか静か、で、なんか・・・すごい大事な感じがし・・ますね。これ・・・あ、なんていうか・・・うん・・・

L2:静かで、大事な感じがする。

F3:この、「とき」が、大事な感じがしますね・・・。なんか・・・。（トーンが下がる）

－中略－

（話し手は、器の写真について、景色の写真と同じ雰囲気で、静かで大事な感じと話す。そして「とき」を感じ、何もないところから何が起こってくるだろうという感じがして、それが生まれる時間のゆとりがあるとよさそうだと話す。話し手は、器から感じられる感じを感じていると、からだが緩むようで、このような時間が必要であることを忘れていたことを思い出した感じだと言いながら、

写真を味わった。次に別の写真について話し、一通り話し終えたところで、聴き手は次の問いかけをした。）

L13:聴いてみてもいいですか。＜はい＞大丈夫？＜はい＞あの、これ[金箔のうさぎ]がね、これがなかったら、なんかすごくこう眺めていたいな、いい感じだなあって言ってた。＜そうですね＞何か、自分がああいい感じだな、ずっと眺めていたいなと思うのを邪魔するというか、妨げるようなもの、って何かありそうですか、というのをちょっと聞いてみたかった。

F14:あー、いい感じだなあというのを邪魔する、妨げるもの（笑い）＜これ、隠して、そうするといいなって言ってた＞あー、そういう感じはありますね。（笑い）そういう感じはありますね。ありますね。はは。すっごくふっと、あの、結婚生活が浮かんできて。なんていうか、悪くないんですけど。笑えてきて。－略－

（このあと、話し手は、結婚生活の様子を始終笑いながら話した。聴き手も思わず笑いながら、ほほえましく感じながら聴いていた。話し手が現在の生活をいとおしんでいるように、聴き手には感じられていた。）

後日、作製者から以下のメールが寄せられた。長い文章のため、一部略して掲示する。

まさに今の自分の生活にぴったりしすぎて、今の自分の状況そのものがあらわれているのに気がついて、とても面白かったように思います。－略－　うさぎがある今のこの自分の状況がかけがえなくとても大切で、－略－　自分の心地よさをすこし邪魔するようなもの、として感じたりもしているんだなと思うと、人生これが現実というものなのだと、妙にしっくりくる感じがあったと思います。－略－　そういったいろいろを含め、現実を（肯定的に）しみじみと実感したという感じでしょうか。　　（　）は本人。

２－１　事例２の考察

聴き手は、事例１と同様に、話し手の話を聴きつつ、写真の感じを感じていた（二重の追体験）。間もなく話し手は、金箔のウサギの写真を手で覆った。そして、これがなかったら落ち着くいい景色だと言い、その景色を味わった。ここでは、手で覆うというコラージュにかかわる身体のふるまいが見える。つまり、もう一つの可視化である。聴き手は、手で覆った“この感じ”に問いかけた。すなわち、“落ち着くことを妨げることはありそうですか？”という問いである。にわかに話し手は笑い出した。笑いが起こるのは、作製者に何かが起こり、身体が変化したといえるだろう。感じられた感じが変化し、新しい局面が現れた。話し手が実感にふれる様式を示した EXP スケール（体験過程スケール）の評定基準においても、笑いが起こるのは、気づきが生じて、さまざまなことに

その気づきが応用される段階であることが示されている（池見、田村他,1986[31]）。何か新しいことの到来であるともいえるだろう。作製者には途端に日常生活が想起され、愉快な状況が語られた。それは、かけがえのない関係であるにもかかわらず、ときには邪魔にもなること、それも現実だと思いつつ、総じて肯定的なものであること、などであった。自分自身の現在の生活を、あらためて実感したようであった。

３．事例 3

３つ目に掲示する事例は、問いかけがうまく機能しなかった例である。事例 1 と同様のグループコラージュの事例で、ここでは作製者が筆者である。聴き手はグループのメンバー3 名である。フォーカシングのセッションでは、どのように応答してほしいかを体験の主であるフォーカサーに尋ねるというフォーカサー・アズティーチャーの考え方がある（近田,2002[32]）。これに依拠して、作製者自身が語るときに感じたことを詳細に記述することで、体験はどのように進展するか、どのような応答の可能性があるのかを検討することを試みたい。記録は IC レコーダーで録音され、筆者が逐語を起こした。以下の記録は、右上の靴を履いている写真について語られたところである。F は話し手（作製者）、A,B,C はグループメンバーの各聴き手、二重線、波線は話し手の感じが出てきたところ、一重線は互いの応答を表す。また、逐語の間に太字で示した箇所は、応答についての検討、作製者が感じていたことを記述している。（　）内は筆者の補足である。

コラージュ 3

初めに話し手は、右上の靴の写真について、“この背景はなんとなく、あの、広ーいこう、何かな、砂浜という感じかな。どっちかっていうと。そういうところにいて、で、ひもを結んで、今から、歩きますっていう感じですかね。”と語った。それから、他の各写真について一通り語り、再度右上の写真について問いかけられたところからの記録である。

A1：右上のあの、あれは、砂漠を歩くんでしたっけ？

F1：砂漠？砂浜？かな。ちょっとだから、今まだ砂浜に足はついていないんですよね。ちょっと上の方で腰かけて、いてて、ひもを結んだから降りましょうって感じ①。

砂漠ですか？と問われると、自分の感じはどうだろう？と改めて確認する。話し手にとっては、砂浜であった。感じを確認できる問いかけであった。
砂浜であることを確認し、再度、この写真の感じを感じてみると、やはり、最初に語ったように（二重線の部分）、ひもを結んだから降りましょうって感じ①であることが、まざまざと身体的な感覚を伴って感じられていた。

B1：砂浜で歩くっていうのは、何か意味があるんですか？（１）歩きにくいじゃないですか。普通あの靴では。
F2：そうですよね。歩きませんよね。

（１）の返答
何か意味があるのか、という問いにはぴんときていないため、そっけなくそうですね、と返答している。話し手は、この写真の感じを感じたいと感じていた。

A2：左の下ですよね。（A は、左下の夏らしい砂浜が歩くにはふさわしいと言っている）
F3：何か、何でかわからないけど、砂浜をイメージするんですよね②。あれね。

写真に背景はない。しかし、話し手は自分でもわからないが、なぜか砂浜をイメージしていた。“砂浜”に何か意味がありそうである。

A3：でもつぶつぶはつきたくないんでしょうかね（２）。ちゃんと覆った靴を履いていくっていうのは。
F4：あ、裸足じゃなくって、という意味ですか？

（２）の返答
話し手は、“砂浜”は一体何なんだろうと感じているので、靴や足に焦点を向けられても響かない。

A4：ええ、あれだったら、砂浜の感触とかを楽しんだり、ちょっと海にも入れたりもするじゃないですか、左下のだったら。でもそういうふうな、じゃない。（３）

F5：うーん・・・砂浜の感触を味わうとか、海に入るとかっていう考えはいっさいないんですよね。

（３）の返答

焦点は砂浜そのものに向けられているので、味わうとか入るなどの主体に向けられた問いは邪魔になっている。

A5：砂、砂地を歩く。

B2：そういう砂浜じゃないんですね。ようは、リゾートの、そういう砂浜じゃない。こっちとは違う砂浜なんですね。

F6：そうですね。・・・なんで砂地を歩かなきゃいけないんだろうと思うんですよね。

ここで、B2 に“砂浜”に焦点を向けられたので、話し手が今感じていることを言語化できている。話し手は、今度はなぜ砂地なのだろうと、砂浜よりも“砂”に感じが向けられた。

A6：砂漠かもしれない。やっぱり海辺を歩くんですね。

F7：うん、砂、砂

今、砂を感じていると表明している。砂浜から“砂”になったのである。

B3：精神性みたいなものですか？それは、それともリアルに本当に？

F8：うーん、なんで砂浜を歩くんかな・・・。（メンバー笑い）

ここでは、砂のメタファーを尋ねられ、B3 はリアルに？と言い添えているが、砂自体から離れてしまった。再び話し手は、自分でもわからないと表明した。

A7：潮風とか、そういうふうなのは関係ない。とにかくあの砂浜、ちょっとののめりこむ、靴で歩いたらちょっとのめり込んだり。足跡が、あのなんかしっかり、あの残りそうですよね。ふり返ったら。（うーん）何がいいんでしょうね。

F9：うーん。じゃりじゃりとした感じでしょうかね。とか、ま、あの、とにかく、アスファルトの上を歩くっていう感じは全然ないんですよ。（あー）

砂の感じ、“じゃりじゃりとした感じ”がやっとひとつ表現された。そして、アスファルトではなく、“砂”の感じであることを強調している。

A8：足跡が残るっていう感じでしょうか。（4）歩いてる、っていう感じとか。
F10：足跡、足跡はどうでもよくって。

（4）の返答
砂の感じがやっと出てきたところで、足跡と言われ、邪魔になっている。

B4：砂浜って靴を履いて歩くと一番歩きにくいじゃないですか。（うんうん）まだ裸足の方が楽だし。（そうそう楽だし）わざわざ靴を履いて。
F11：うん、なんとなく感触がいいという感じはありますね。ちょっとこう、埋もれつつ、抵抗がありつつ、（うん）歩くっていう感じが。

話し手にとって砂浜は何だろうという問いは、やっと砂の感じに問いかけられた感じである。なんとなく感触がいいと表現された。ここで、“埋もれつつ、抵抗ありつつ”と表現され、A7 の発言に通じるものがある。A7 では、足跡に焦点が当てられていたため、F9 には響いていなかった。

B5：クッションがある。
F13：あ、クッションがある。柔らかいっていえば、柔らかい感じはありますね。アスファルトの上をかかっと歩くよりは。柔らかい感じはありますね。

B5 のクッションという感じを感じてみると、クッションという感じもあることがわかった。さらに、“柔らかい感じ”という新たな側面が明在化された。

A9：歩いているっていう実感も。
F14：うん、あ、歩いている実感は、たぶんアスファルトの方が、歩いている実感はあると思うんです。ぱぱぱっと。
C1：この歩きにくい靴で砂浜を歩くことが、心地いい？
F15：ははは、心地いいですね。なんとなく。心地悪くはないですね。
C2：歩きにくくはない？
F16：歩きにくいだろうけど、それがいい。
C3：感触がいい。
B6：ぜったい砂入ってるし。

F17：ははは。靴汚れるしね。
B7：うっとおしい。

“心地いい”、歩きにくいのに、“それがいい”など、なんとなく感じをいっているようだが、次のF18を見るとわかるように、A9～B7のやりとりでは、話し手はあまり感じにふれていない。応えること自体に終始している。

F18：ねえ、なんだけど、なんかそれが、なんか不思議に。これで、砂浜を歩くのがなんとも味わい深いというか。なんかわからないけど、いい感じですね。柔らかさっていうのはありそうですね。じゃりじゃりした感じとか。

ここで話し手は、感じに戻っている。“不思議な感じ”や“味わい深い”“なんかわからないけどいい感じ”などの感じられた感じを言語化している。

B8：あー、抵抗がないんよね。
C4：じゃ、砂浜じゃないとだめですね。やっぱり。（うーん）
A10：広―いとか、そんなん、でしょうかね？海、とか、は関係ない。砂浜と道の違いって、片っぽがぜんぶ海だから、視界が。限りなく遠くまで見えるっていうのと。あとどんな違いがあるんでしょうね。（5）
F19：うん、・・・あまり種類とか関係ないような気がするんですね。（5）の返答

（5）の返答
F18 で何かの感覚があることを示したが、ここで再び砂浜自体を問われ、ズレた感じを感じた。

A11：足の、その感触。
F20：うん、・・・歩きにくいところをあえて歩いてみようと思っているのかしれませんね。

“かもしれない”とまだ話し手にもあいまいである。そうすると、“そのように歩いてみるとどんな感じだろう？”と話し手自身に確かめてもらうとよいだろう。

B9：足跡とかはまったく関係なく。
F21：うん、うん。・・・（12秒）

C5：じゃ、この靴を履いて歩く感触って伝わってきますか？（うん）

B10：それは快、快っていうか、自分にとって、あ、イメージしていたようだなっていうか、いい感触？

F22：悪くないんですよね。いい感じなんですよね。うん。・・・（14 秒）今ちょっとそういっていて、今一つ浮かんでいるのが、いえ２つ浮かんでいて。－中略－スムーズさはないんだけど、埋まる感じが手応えがあり、ちょっと歩きにくいけど、ま、結構いいかもしれないみたいな感じですかね。

話し手は、以上のような砂地を歩く感じと状況を重ねた。そして、2 つの具体的な事柄を説明し、歩みづらい状況ではあるが、手応えもありよいかもしれないと結んだ。しかし、これは無理やり状況につなげた感じもあった。何かまだ他にあるような、十分感じられない感じがあり、話し手には、どこか不全感が残った。

３－１　事例の考察

①　二重の追体験からの問いかけ

話し手は、F1 で、ひもを結んだから降りましょうって感じ①とまさにこの写真の感じを表現している。このようなときは、聴き手は、話し手の言葉と写真を感じてみる（二重の追体験）。そうすると、たとえば「よし、行くぞ！」「出発！」「決意のような、挑戦？」「しかし、ちょっぴり怖さもある？」のようないろいろな感じが湧いてくる。そこで、当の作製者はどのような感じだろうかと聴いてみたい。たとえば、“ひもを結んだから降りましょうってどんな感じでしょう？”と問いかけられる。この問いかけによって、話し手は、この写真の感じをさらに感じることになる。体験過程を指し示す（Gendlin,1968[33]）問いであり、多くの暗黙の意味から言葉が立ち現われる契機になると考えられる。

②　まだわからない感じを感じてみることからの問いかけ

まだわからない感じに留まり、その感じを感じてみることは何かが開かれる可能性であることを前述した。ここでも、作製者は、F3 で、何でかわからないけど、砂浜をイメージするんですよね②と語っている。わからないと言われると、聴き手としては通り過ぎてしまいそうであるが、まだわからないということは、何かはあるがまだぼんやりしているところにいると考えられる。つまり、砂浜はまだ暗在である。したがって、この辺縁に問いかける。“砂浜というと、どんなイメージでしょう？”“砂浜を歩くことを想像してみると、どんな感じがしますか？”などである。同様に、F6 でも、何で砂地を歩かなきゃいけないんだろうと思うんですよね。と砂に関心が向けられているがまだわからない。ここでは、“なぜ砂地なんでしょう？”という問いかけも考えられるが、理

由を尋ねるよりも、“砂”の感じに注意を向けた方がよいだろう。砂地に意味があるとすれば、“砂地を歩くことを想像してみると、どんな感じがしますか？”という問いかけも考えられるだろう。次に F20 を見ると、“あえて歩いてみようと思っているのかしれませんね”と表現している。これもまだ明確になっていないところである。したがって、文中にも記述したように、“そのように歩いてみるとどんな感じでしょう”と話し手自身に確かめてもらう時間を取るとよいだろう。

③　何かの感じが現れたときの問いかけ

事例では、様々な問いかけがなされるがなかなかうまく機能していない。しかし、やっと、話し手の感じが現れるところがある。たとえば、F9, F11, F13 である。F9 の“じゃりじゃりとした感じ”F11 の“感触がいいという感じ”では、何かの感じが感じられていることがわかる。F11 では、“埋もれつつ、抵抗がありつつ、歩く感じ”がいいと言う。ここは、もう少しこの感じを感じてみたいところである。聴き手にはもう一つよくわからない感じでいる。スムーズでないこと、楽な歩き方でない方を話し手は敢えて選んでいるようである。そうすると、この感じは何だろう？と疑問が湧いてくる。このようなときは、聴き手に浮かんでいることを伝えることも一つのあり方であろう。また、“そのような感じを感じてみると、どうですか？”とさらに話し手の感じに問いかけてもよいだろう。さらに、“じゃりじゃりした感じで、埋もれつつ、抵抗がありつつ歩く感じの感触がいい感じという砂浜って何だろう？”“あなたにとって、そういう砂浜って何を表しているのだろう？”と状況とつなげるような問いかけもよいかもしれない。いずれにせよ、“この感じ”から離れないでいることが重要である。

F13 では、B5 で“クッションがある”と B の追体験を伝えている。話し手にはなかった感じであるが、“あ、クッションがある”と B の感じと重なり、新たな別の側面が現れた箇所である。

④　何かの感じに留まる問いかけ

しかしながら、このセッションでは、F13 のあとは、感じる間もなく、問いが続いてしまう。そして話し手は、F18 で感じに戻った。“ねえ、（そう）なんだけど”“不思議に”“なんとも味わい深い”“なんかわからないけど、いい感じ”と続けている。何かよくわからないが、ここに感じる何かがあるようだ。このようなときは、感じられた感じから言葉が出てくるのを待つのがよいだろう。まだ言葉にならない何かがある。感じられたところからは、すぐには言葉が出てくるとは限らない。暗在にあるものは非常に多く複雑であるので、少し待つ必要がある。聴き手も、そこにともにいて待つ。たとえば、“その感じを少し味わってみましょう。そこから何が出てくるか待ってみましょう”という問いかけがあるだろう。

Ⅴ　総合考察

１．機能する応答：二重の追体験と可視化されたものに焦点を当てる

以上見てきたように、本稿においては、機能する応答には、二重の追体験と可視化されたものに焦点を当てることが必要であるといえるだろう。コラージュワークにおいて、聴き手は、話し手の話を聴きつつ、写真の感じを感じるという二重の追体験をしていることを見てきた。まさに、話し手の今語られていることと可視化されたものをともに感じ、体験しようとしている在り様である。そして、可視化されたものに焦点が当てられ、問いかけがなされる。

また、事例 2 で見たように、身体のふるまいが、話し手の感じられた感じを可視化したものとして現われることもある。すなわち、身体のふるまいにも、感じられた意味が含意され、身体のふるまいを含めた応答が可能になる。さらに事例 2 では、笑いを伴ったシフト（変化）が生じ、新たな局面が現れた。可視化を中心にして、聴き手の二重の追体験による応答は、まさに、話し手の体験過程（感じられた感じ）を指し示す応答（Gendlin,1968[34]）であるといえるだろう。

具体的には、本事例のなかでは、１）二重の追体験においてズレが生じた場合に話し手に確認する問いかけ、２）二重の追体験において聴き手に新たなイメージが浮かんだ場合に話し手の感じを確認する問いかけ、３）身体のふるまいなど別の可視化が表されたときに、その可視化されたものについて問いかける問いかけ、などの応答の可能性が見出された。

２．機能する応答：まだよくわからない感じをさらに感じられるような問いかけ

矢野（矢野,2008[35]）は、まだよくわからない切抜きには、作製者の“そのとき”に必要な意味が見出されることがあるとして、重要視した。コラージュを見てみると、作製者にはなぜかわからないが貼ったという切抜きがある。つまり、作製者にとっても「まだよくわからない」切抜きの存在である。このような切抜きに関わることで、意外な意味が見出されることがある。本稿においては、何かを感じるがまだあいまいでぼんやりとしていると語られるときの問いかけに注目した。ジェンドリンは次のように記述している。

多くの暗黙の側面が、感じられているが、まだわからないなかに、ある（Gendlin,1968 p.213[36]）

わからない感じは、何かが生まれる可能性である。したがって、ぼんやりしているところに問いかけ、明在化することを試みる。たとえば、事例 3 で見たように、“砂浜はどんなイメージだろう？”“これで歩くことを想像するとどんな感じだろう？”といった問いかけが考えられる。聴き手は、話し手とともにまだよくわからないところに留まるのである。

３．機能しない応答

機能する応答と比較し、機能しない応答を考察すると次のようになるだろう。１）話し手の感じ

られた感じに添わず、聴き手のイメージが先行している応答である。しかし、逆にこれは、話し手にとって「そうではない」と感じられた感じが明確になるときもある。また、その応答が刺激となって別の側面が立ち現われる可能性もある。本事例では、逆の効用よりも、むしろ邪魔になることの方が多かったようである。2）可視化されているものが十分に生かされておらず、何かずれが生じている応答である。つまり、“感じ”に焦点が当てられず、退いた背景に焦点が当てられているような場合である。このような場合は、話し手の感じ自体にはなかなか問いかけがなされない。また、やりとりが“感じ”からどんどん離れていくだろう。3）“感じ”に留まらない応答である。明確化を急ぐあまり、畳みかけるように質問がなされ、話し手が感じる間がない場合である。

以上、本稿で掲示された事例を通して、機能する応答と機能しない応答について検討してきた。コラージュワークにおいては、二重の追体験と、そこからの応答が機能することが示された。また、コラージュワークにおいて可視化されたものに問いかける応答は、体験過程を指し示す応答（Gendlin,1968[37]）として考えられ、重要であることが明らかになった。コラージュは、作製者の生きる過程が表されたものである。応答の可能性は種々あると考えられるため、今後もどのような応答が機能するか実践を重ね、検討していきたい。

Ⅵ　まとめ

コラージュワークにおいて、写真のもつ存在感は大きい。聴き手は、話し手の語り以上に、可視化された写真に注目している。作製者によって選ばれた、暗黙に多くの意味が含意されている写真が、聴き手に語りかけ、加えて、写真そのものがもっている存在感、写真の表情から生み出されてくる何かがあるようである。写真は物であるが、その物が語りかけ、作製者と、そして聴き手と、さらに作製者と写真と聴き手の関係がつくられてくるようなものとなる。写真がまさに、「他なるもの」（三村,2016[38]）となり、これを中心に問いかけ、新しい意味が生み出される。ブーバー（1978[39]）が、それ it が汝と呼ぶものとなったときに、我と汝の関係となると語っているが、写真は、そのような力をもち、作製者の体験過程を推進させ、作製者にとっての意味を創り、新しい理解をもたらすのであろう。

本稿においては、写真という可視化されたもの以外に、可視化された身体のふるまいに焦点が当てられた。話し手の感じられた感じは、表情や声の調子にも表れるだろう。それらも可視化された切抜きとともに表されたとき、もう一つの可視化されたものとして、どのような応答が話し手の体験過程を進展させるか、今後検討したいところである。

さて、暗黙的に多くの意味が含まれる一つの写真（切抜き）から言葉が紡ぎだされ、作製者にとっての意味が見出されていく過程は、TAE（Thinking at the Edge, Gendlin,2004[40]）のプロセスに相通じるものがあるのではないかと考えられる。TAE は、自身の感じられた感じから辞書的な

意味を超えて、豊かな独自の意味が生み出されることを促すものである。コラージュワークの意味創造は、TAE の新たな展開をもたらす可能性として考えられるのではないだろうか。

最後にトレーニングの可能性について言及したい。フォーカシングセッションにおいて、話し手の感じられた感じ（フェルトセンス）に、どのように体験的な応答をするか、問いかけをどのように行うかは、プロセスの推進において重要である。コラージュワークでは、フェルトセンスが可視化されているので、話し手と聴き手とで共有されやすい。こういったコラージュワークの特徴は、フェルトセンスへの関わりのトレーニングに応用できるのではないかと考える。さらに、コラージュワークでの聴き手の二重の追体験は、聴き手の感覚を醸成するトレーニングの役割を担えるのではないだろうか。語りと切抜きから感じられる感じと、切抜きから聴き手に呼び起す感じの、重層的なところを感じる体験は、カウンセリングにおいて話し手から伝わってくることを感じることにもなるのではないだろうか。

付記

本稿は、2017年日本人間性心理学会第36回大会での研究発表をもとに加筆修正したものである。事例報告に快諾いただいたコラージュ作製者、コラージュ・メンバーの皆様に感謝したい。

引用・参考文献

---

[1] Ikemi,A. Yano,K. Miyake,M.and Matsuoka,S. Experiential Collage Work.:Exploring Meaning in Collage from a Focusing-oriented Perspective.『心理臨床学研究』25(5),2007.pp.464-475.

[2] 矢野キエ「体験過程流コラージュワークと意味の創造」、『人間性心理学研究』28（1)、2010 年、63-76 頁。

[3] 矢野キエ「体験過程流コラージュワークの実際」、『日本人間性心理学会第 27 回大会発表論文集』、2008 年、60-61 頁。

[4] Gendlin, E.T. “Crossing and Dipping: Some Terms for Approaching the Interface between Natural Understanding and Logical Formulations.” *Mind and Machines.5*, 1995, pp.547-560.

[5] 同上

[6] Gendlin E.T. “The experiential response.” HammerE(Ed) *Use of interpretation in treatment*. (New York: Grune & Stratton,1968), pp 208-227.

[7] 同上

[8] 矢野キエ「気づきが生まれるところに働いていることーコラージュワークの体験よりー」、『日本人間性心理学会第 35 回大会発表論文集』、2016 年、48-49 頁。

[9] 前掲書

[10] 前掲書

[11] Rappaport,L. *Focusing-Oriented Art Therapy. Accessing the Body's Wisdom and Creative Intelligence.* (Jessica Kingsley Publishers.: London and Philadelpria,2009), p.87.

[12] 前掲書

[13] 矢野キエ「アートセラピーとフォーカシング」、池見陽編『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング』ナカニシヤ出版、2016 年、180-188 頁。

[14] 前掲書

[15] 前掲書

[16] Gendlin, E.T. *Let Your Body Interpret Your Dreams.* (Chiron: Wilmette, Illinois, 1986).

[17] 三宅麻希「体験コラージュ法（Experiential Collage Work）におけるリスナーの応答の特徴について」、『日本人間性心理学会第 26 回大会発表論文集』、2007 年、140-141 頁。

[18] 前掲書

[19] 矢野キエ「自己理解と他者理解のためのカンバセーション・コラージュワークー他者との関わりから生まれるものー」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第 52 集、2012 年、75-86 頁。

[20] 矢野キエ「カンバセーション・コラージュワークにおけるかかわりの可能性ー暗在が明在化するためにー」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第 53 集、2013 年、77-88 頁。

[21] 前掲書

[22] Gendlin E.T. *Experiencing and the Creation of Meaning. A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective.* (Northwestern University Press:Evanston, Illinois,1997　初版は 1962), pp.90-137.

[23] 前掲書

[24] Ikemi Akira "The radical impact of experiencing on psychotherapy theory: an examination of two kinds of crossings." *Person-Centered & Experiential Psychotherapies.* Vol.16, No2, 2017, pp.159-172.

[25] 同上

[26] 前掲書

[27] 前掲書

[28] Gendlin,E.T. "The Responsive Order：A New Empiricism" *Man and World* 30,1997, pp.383-411.

[29] 池見陽 2016「セラピストが聴くとき何が起こるのか」、池見陽編『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング』ナカニシヤ出版、93-95 頁。

[30] 前掲書, pp.167-168.

[31] 池見陽・田村隆一・吉良安之・弓場七重・村山正治「体験過程とその評定　EXP スケール評定マ ニュアル作成の試み」、『人間性心理学研究』4、1986 年、50–64 頁。

[32] 近田輝行『フォーカシングで身につけるカウンセリングの基本ークライエント中心療法を本当に役立てる

ために』　コスモス・ライブラリー、2002 年。

[33] 前掲書

[34] 同上

[35] 前掲書

[36] 前掲書

[37] 前掲書

[38] 三村尚彦「新しい意味は、どのように創造されるのかージェンドリン哲学にもとづく考察ー」　日本人間性心理学会第 35 回大会自主企画発表資料、2016 年、1 頁。

[39] マルティン・ブーバー　田口義弘訳『我と汝・対話』　みすず書房、1978 年。

[40] Gendlin,E.T.　" Introduction to 'Thinking at the Edge'." *The Folio* 19(1), 2004, pp.1-8.